

学位論文抄録

若年性アルツハイマー病における精神症状と認知症重症度との関連
(Relationship between neuropsychiatric symptoms and dementia severity
in early-onset Alzheimer's disease)

田中 響

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神科学

指導教員

池田 学 教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神医学

学位論文抄録

[目的]

認知症に伴う精神・行動症状 (behavioral and psychological symptoms of dementia; BPSD) は、認知症の背景疾患によりその特徴が異なることが知られているが、認知症の重症度にも影響を受けることが知られている。しかしながら若年性アルツハイマー病 (early-onset Alzheimer's disease; EOAD) においては、患者そのものの数が少ないこと、また病院ベースでは認知症重症度が軽症の患者に偏ることなどから、認知症の進行に伴う BPSD の変化については明らかにされていない。本研究では、病院ベーススタディに訪問ベーススタディを加えることで、幅広い重症度の EOAD における BPSD と認知症重症度の関連を明らかにすることを目的とした。

[方法]

研究対象は Kumamoto University Dementia Follow-up Registry から選択された EOAD 患者 63 名と、若年性認知症全県調査から選択された 29 名である。Clinical Dementia Rating (CDR) を用いて軽症群 (CDR 0.5-1, n = 55)、中等症群 (CDR 2, n = 17) および重症群 (CDR 3, n=20) の 3 群に分け、BPSD を Neuropsychiatric Inventory (NPI) によって評価した。

[結果]

NPI 下位項目では、興奮、多幸、アパシー、脱抑制、易刺激性および異常行動の項目で認知症の悪化に伴いスコアは有意に増加した。幻覚は軽症群と比較し中等症群でスコアが高かった。妄想、うつ、不安は 3 群間において統計学的な有意差は認められなかった。

[考察]

EOAD 患者において興奮、アパシー、脱抑制、易刺激性および異常行動は認知症の進行に伴い悪化するパターンをとり、晩発性アルツハイマー病患者と似たパターンを呈した。一方で幻覚、うつは EOAD 患者において特有のパターンを示していた。